

## 令和5年のアワビ漁況

### 1. 令和5年の漁模様

本県のアワビ漁は6～10月にかけて、主に素潜りで行われます（10月は特別採捕許可による操業）。近年は時化による高波や水色の悪化に加えて、令和2年以降の新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響等で延べ出漁日数の減少が続いていましたが、昨年からは増加に転じ、今年も漁期全体で160日の出漁がありました（図1）。

一方で、今漁期の漁獲量は11.5トンで、前年より減少しました（前年比68%、図2）。また、1日あたりの漁獲量（kg/日）も前年に比べて減少し、72.1kg/日となりました（前年比52%、図2）。震災以降、自主的な獲り控えや種苗放流の再開によってアワビ資源は回復傾向にありましたが、今年の漁模様からは資源状況の悪化が懸念されます。

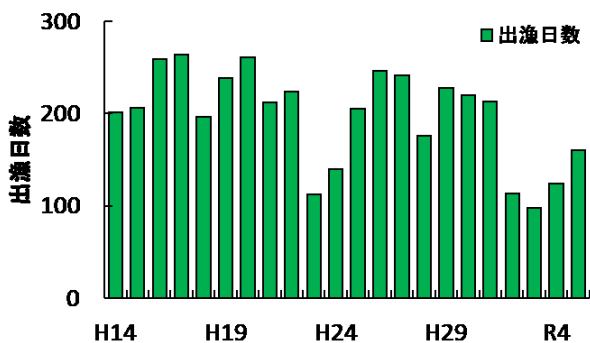


図1. 茨城県におけるアワビ漁の延べ出漁日数。  
※地区ごとの出漁日数の合計

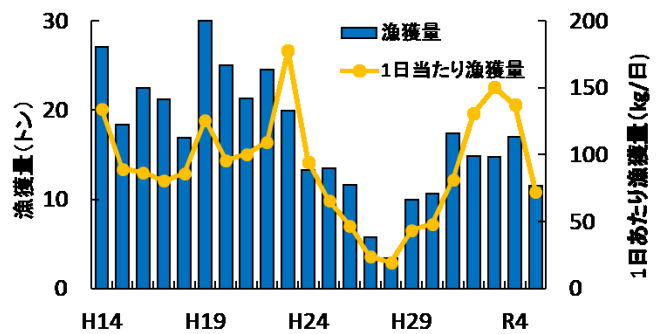


図2. 茨城県におけるアワビ漁獲量と1日あたり漁獲量の推移。

### 2. 種苗放流の効果

本県のアワビ資源は天然と人工種苗（放流貝）が由来となっており、毎年約24～30万個の人工種苗が放流されています。人工種苗のアワビは殻の頂点付近（若い頃の殻）が緑色で、天然貝と見分けることができます（図3）。

水産試験場では、毎年漁獲されたアワビに人工種苗がどの程度含まれているかを調査しています。今年の人工種苗の割合は13.3%で昨年より大きく減少しました（前年比37%、図4）。東日本大震災の影響で放流数が減少し、H27～30年には低い割合（21.4～30.7%）となっていました。今年はそのさらに下回りました。これが今年だけの特異的な現象なのか、引き続き情報収集を進めてまいります。

アワビ資源の維持・増大を図るために今後も自主的な漁獲管理や種苗放流の実施等、適切に資源管理をしていくことが大切です。



図3. 天然と人工種苗の見分け方. 人工種苗は矢印で示す殻の頂点付近が緑色になっている。

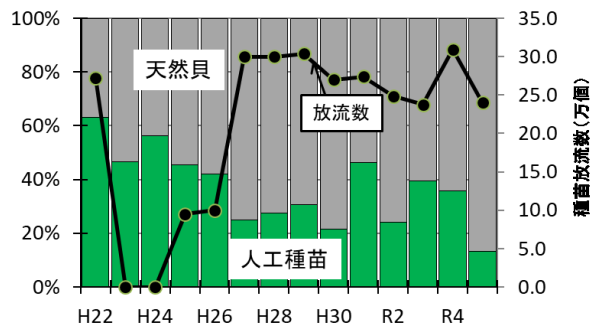


図4. 漁獲物に占める人工種苗の割合と種苗放流数の推移. 放流種苗の漁獲は放流から約3年後以降となる。

（定着性資源部 多賀 真）

【次回予告】 令和5年12月15日発行の水産の窓は「令和5年12月の海況と今後の予測」を予定しています。